

応答やあいづちに用いられる照応的な「そう」について： 談話データにみる自然な対話の特徴

北野 浩章

1. はじめに

本稿は、応答（「はい、そうです」など）やあいづち（「そうそう」など）に現れる「そう」を考察するものである。従来、応答とあいづちという別々の研究分野で分析が行なわれてきた「そう」であるが、自然談話での「そう」を観察すれば、そもそもは同一の語であり、そのふるまいに顕著な違いを認めることは難しい。「そう」の包括的な理解に役立つような観察と分析を提供し、応答研究とあいづち研究の両方に貢献することが、本稿の第一の目的である。

まず2節では、「そう」がこれまでどのように研究されてきたかを簡単に振り返る。3節では、自然談話データでの「そう」の使われ方を観察する。4節では、応答の「そう」とあいづちの「そう」の関係をさらに詳細に分析し、応答とあいづちの関係を考察し、さらにその延長線上で、文法（研究）と談話（研究）の関係にも触れる。

また、「そう」の分析を通じて、自然談話の実態の理解と研究方法の開発のための手がかりを追求することが、本稿の第二の目的である。

2. 先行研究

この節では、「そう」を扱った先行研究を概観する。

2.1. 応答の研究

日本語文法の概説書である益岡・田窪 1992は『『そうだ・ちがう』は、相手が自分の判断を持ち、その当否を尋ねている場合の答えに限られる』（益岡・田窪 1992: 138）としている。

- (1) 甲：これはあなたのですか。
乙：（はい）、そうです。
- (2) 甲：この近くに食堂ありますか。
乙：*はい、そうです。

応答の「そうです」を扱った研究としては大島 1995 がある。大島は、応答句「そうです」で答えられる質問文の典型として、「のだ」文、名詞述語文、ダ型文を挙げている。以下に大島の例を引用する。許容度判断もすべて大島によるものである。

(3) 「のだ」文

- a. きのうち太郎に会ったのですか？ - そうです。
- b. きうちの試験は難しかったのですか？ - そうです。
- c. きのうち太郎に会いましたか？ - ??そうです。

(4) 名詞述語文

- a. 鈴木さんは学生ですか？ - そうです。
- b. あなたはまだ結婚しないつもりですか？ - そうです。

(5) ダ型文 (分裂文など)

- a. 花子と出会ったのは去年のクリスマス・パーティでですか。 - そうです。
- b. 太郎がラブレターを送ったのは花子にですか。 - そうです。

大島は、「のだ」文、名詞述語文、ダ型文はすべて「表現の提示」という機能を持つ「表現提示形式」であるとし、表現提示形式を質問文にしたものはいずれも、提示した表現が適切かどうかを問う働きを持ち、そのような質問文に対しては「そうです」で答えることができる、としている。したがって、応答句「そうです」の機能は「質問文に提示された表現が別の表現や状況に関連するものとしてふさわしいものであるということを示す」(大島 1995: 113) ことであると結論づけている。

「表現の提示」という意味的な側面はともかく、大島によると、表現提示形式とは「X ハ Y ダ」という形式を持つものであるから、形式を重視した一般化をすれば、「そうです」で答えられる質問文の典型は「X ハ Y (デス) カ？」である、と考えていいだろう。

ただし、大島 1995 は、「そうです」という応答が可能な、典型的でない質問文についても述べている。例えば、以下のような相手に確認を求める文には、「そうです」による応答の許容度が高くなるようだ、としている (大島 1995: 113)。

- (6) a. きみはきのうちこのパソコンを使ってたね？ - ?そうです。
- b. きみはきのうちこのパソコンを使っていましたか？ - ??そうです。

すなわち、「X ハ Y (デス) カ？」という形式だけが「そうです」という応答を許容するわけではない。

この他にも応答の研究としては、応答詞「はい」「いいえ」の用法を調査した奥

津 1989、沖 1993 や、森山の諸研究（1989, 1993 など）がある。応答研究の中心課題の一つは「どのような対話（隣接対 adjacency pair）のパターンが可能か、そしてそれはなぜか」を解明することであるが、人為的に作られた対話だけを資料としていては解明は難しい。自然な対話を作成することも難しいが、許容度を判断する際に様々な推論、想像、邪念などが介入するだろうし、文単位で許容度を判断することに比べてはるかに個人差や個人内でのゆれが大きいと思われるからである。奥津 1989 のように、自然談話資料を調べる必要があるだろう。

2.2. あいづちの研究

同じく「そう」を含む表現を扱った研究の流れとして、あいづちの研究がある。主に日本語教育との関連で、あいづちの分類や機能などを扱ったものとして、水谷 1983, 1984, 1988、小宮 1986、堀口 1988, 1991, 1997、松田 1988 などが挙げられる。その他にも、会話分析、対照研究、音声分析などの様々なアプローチによる研究（Maynard 1986, 1989、黒崎 1987、杉戸 1989、ザトラウスキー 1993、メイナード 1993、杉藤 1993、喜多 1996、Clancy et al. 1996、Hayashi 1996、Iwasaki 1997、ナガノ・マドセン・杉藤 1999 など）がある。

しかしながらもちろん、これら諸研究が共有する統一的なあいづちの定義があるわけではない。実質的な内容を含まない非語彙的な発話のみに限定するものから、対話相手の言ったことの繰り返しや、非言語的なものまであいづちに含める考え方もある。

本稿の「そう」については、あいづちの一種として「そう」「そうそう」「そうですか」「そうですね」などの形をとることが観察され、指摘されている。しかし、あいづち研究では、あいづちの種類、頻度、機能、効果、タイミングなどを調査したものが多く、2.1. で見たような、質問に対する応答の一部とは認識されていないようである。しかし、「そう」は指示表現（照応表現）の一種である。したがって非語彙的な「うん」「ああ」「へえ」「ふん」などとは異なる特徴を見せる。この点は4節でさらに考察する。

2.3. 指示詞としての「そう」

管見の限りでは、応答やあいづちの「そう」を指示詞として扱った研究はない。応答やあいづちではないが、益岡・田窪 1992 は「述語が表す内容を指す表現として、『そうする』、『そうだ』が用いられる。『そうする』は動態述語に対して、『そうだ』は状態述語に対して、それぞれ用いられる」（益岡・田窪 1992: 168）と述べている。

- (7) 甲：僕は、3時の新幹線に乗るけれど、君はどうする。
乙：じゃ、僕もそうする。
- (8) 太郎は、神戸の出身だ。花子も、確かそうだと思う。

「そう」が指示詞であり、したがって一種の談話管理標識である（金水 1999: 70）ことは注意しておくべきであろう。非直示用法のソ系列指示詞は、「話し手が談話に先立って存在を認めている要素を直接指すためには用いられず、主に言語的な表現によって談話に導入された要素を指し示すために用いられる」（金水 1999: 67）。

応答に用いられる「そう」にしてもあいづちに用いられる「そう」にしても、文脈照応の用法を持っていると思われるが、本稿では詳しく議論する用意がない。今後の課題としたい。

3. 自然談話での「そう」

本稿では、人為的に作った作例による対話ではなく、自然談話資料を使って「そう」の実態を調査する。使用する資料は、現代日本語研究会編 1997 の自然談話データである（©現代日本語研究会）。このデータは、女性の話し言葉の実態を調査するために、20代～50代の女性が働く首都圏の様々な職場での会話を録音し文字化したものである。録音時間は約9時間12分で、データの性質上、発話の約8割は女性の発話となっている。

本稿が対象とする、対話相手に対する応答またはあいづちと見なせる「そう」を抜き出してみると、主に以下のような形式で用いられていることがわかる。（データ中の「そお」「そー」「そーおー」などの異なる表記も「そう」で統一した。また、様々な終助詞が後接する場合、それらを { } にまとめて示した。φは、終助詞が後接しないことを表す。）

- (9) そう {φ、ね}（「そうそう」などの反復形も含む）
 そうだ {よ、ね、よね}、そだね
 そうです {φ、か、よ、ね、よね}
 そうなんです {φ、か、よ、ね、よね}
 そうか、そっか
 そうなんだ
 そうなの {φ、か、よ、ね、よね、かな}

「そう」のバリエーション（以下ではこれらを総称で「そう」類と呼ぶことにする）だけでもこのように数多いが、対話相手の先行発話もまた多様である。まず、情報

を持たない質問者と情報を持つ応答者の対話の例を以下に示す。(これ以降の例では、ポイントとなる対話部分は太字のゴシック体とした。)

(10) [3309-3312]¹

- A あ、おはようございます。
B 今日、あの、[駅名]、7時50分のいつもの電車で。
A はい、そうです。
B なん時ごろ着くんでしたっけ、それは。

(11) [1108-1112]

- A ここに書いて、こ、2枚め、ある。
B あ、2枚めに。
A はい。
A すいません、1枚めに書いたほうがいいですか。
B そうね。

このような「質問とそれに対する応答」という隣接対以外にも、「そう」類に先行する対話相手の発話には、同意要求、確認など様々なものが見出せる。

(12) [3917-3921]

- A でも、よく痩せたわねーってゆってねー。
A 今まではら、(うーん 他者(女)) あの一、平均的できてたんじゃなくて、こう上がってきたから。
G ええ。
A それで下がるってのはプラスマイナスの差が大きいでしょ。

¹ 引用した行の番号を[]内に示す。この談話データは、基本的に一行が一文であり、行の先頭の記号は発話者である(「A」「男」など)。データ中で使われている主な記号は以下の通りである。

(): 発話途中の聞き手のあいづち

↑ : 上昇イントネーション

★ : 発話の途中で次の話者の発話が始まった場合の、その発話が始まった時点

→ ← : 前の話者の発話に重なった部分の始まりと終わり

[名字など] : 伏せた個人名、企業名など

<言いさし> : 対話相手のさえぎり、あるいは話者の自発的意志によって、発話が完結せず、言いかけで終わったことを示す

<笑い・複> : 話者を含む複数の笑い

なお、聞き手のあいづちを表す()内にある「Inf」「他者」はそれぞれ、実際に録音をした協力者とそれ以外の人、という意味であると思われる。

G ええ、そう★です。

(13) [8084-8088]

H あれ戻ってきてからでいいですか。

J そだね。

H はい。

J 12月だよね。

H はい、そうです。

また、「そう」も様々な形式で現れる。同意を表す「そうそう」「そうですね」、新しい情報を受け取った場合の「そうか」「そうなんだ」などの使用頻度が高い。

(14) [638-641]

A コンドミニウムなんか全然広いしさあ。

C だってちゃんとー、ベッドルームがふたつみつつとかあるのもあるでしょ。

A そうそうそう。

A 絶対、確実にひとつはあるんじゃない↑

(15) [2446-2451]

男 フォーメーションとか見えないじゃないすか。

A フォーメーションが見えない。

男 ほかのやつの動きのほうがおもしろい★んですよね。

男 →ね、★そう。←

男 →そう。←

A そうなのよね。

(16) [4853-4856]

J そうゆうね、★へまやっってますよね。

A →そうなんだ。←

J だから、見て、これだけは見にいこうなんていって、あの一、あれしてるとね、結局、で、★い、行く、行くと終わっちゃってる

I →そうなんですよね。←

(17) [6432-6437]

- H 25か、26か、25日に帰ってきてる。
A あ、帰ってきてんの↑、もう。
H 帰ってきた。
H いる、予定ですけどね。
G あ、そうか、20日（はつか）出発で★25日だけ。
H →そう、そうそう←そう。

(18) [4285-4289]

- G いやー、おれはそれは作らないよ、自分で食べる分だけだよ。
G なんかあるもんつくるだけでさー。
A でもすご。＜言いさし＞
G それ以外はつくんの女房ね、子供の、つくるからさ。
F そうなんだー。

言語研究者が対話例を作成すると、「情報を持たない質問者の質問・情報を持つ応答者の応答」というパターンが多くなる。それが、最もありふれた、よく見られる、典型的な隣接対と考えがちだからである。しかし、現実の自然会話は決してそうではない。上で見た例のように、雑談など、情報を得たり与えたりすることが最大の目的ではないような会話では、情報を求めたり与えたりする（ことが最大の目的である）発話は、むしろ少ない。²

なお、客観的で厳密な方法で調べたわけではないが、ドラマなどのシナリオでは、雑談のシーンはあまり見られず、情報を持たない質問者の質問と情報を持つ応答者の応答のシーンがかなり目につく。ドラマでは物語を進めることが重要で、無駄話的な要素が強い雑談ばかりでは物語が前に進まない、という事情があるからであろう。だとすれば、シナリオは自然会話を反映しておらず、自然会話研究のためのデータとするには不適當ということになる。

4. 応答とあいづち

応答の「そう」類とあいづちの「そう」類は全く異なるものだろうか。もちろん、両者ははっきり区別できるものではなく、連続していると考えられる。これまでの

² この自然談話データには電話の応対をしている発話はかなり含まれていて、そこでは情報を求めたり与えたりするやりとりがされているようだが、対話相手の発話が録音されていないため、残念ながら隣接対としては観察できない。

研究は、応答とあいづちそれぞれのプロトタイプの「そう」類のみを対象としてきたように思われる。ここでは、研究対象を狭く限定するのではなく、広い視野に立って自然談話を観察し、「そう」類の使用実態を調査し、その上で、この二つのプロトタイプがどのようにつながっているのかを分析することにする。

4.1. 「そう」の語彙的な意味

Clancy et al. 1996 は、“Reactive Token”を“a short utterance produced by an interlocutor who is playing a listener’s role during the other interlocutor’s speakership”と定義し、英語、日本語、中国語で Reactive Token の対照研究を行っている。日本語のあいづちも Reactive Token である。これを、非語彙的な Backchannel と語彙的な Reactive Expression に分けると、「うん」「ええ」「はあ」「ふーん」³などが前者であり、後者には「すごい」「ほんとう」「いいなー」「はい」など様々なものが含まれる (Clancy et al. 1996: 359-360)。本稿の「そう」類は、指示詞の一種であるから後者に分類される。

あいづちの機能をどのように考えるかは非常に難しい問題である。そもそも、通常の言語記号の機能を認定するのと同じやり方で、あいづちの機能を認定できるものかどうかをまず検討してみる必要がある。ここでは、あいづちの機能は何かといった困難な問題は避け（おおざっぱに、聞き手に対する合図、合いの手のようなものと一応考えておく）、「そう」などの一部のあいづちが有する語彙的な意味にのみ言及することにする。

非語彙的なあいづちと語彙的なあいづちでは、明らかに後者が、通常の言語記号と同様に語彙の意味を持っている。すなわち「そう」類には、あいづちとしての機能と、指示詞としての語彙の意味の両方がある。指示詞としての意味は、先行する発話の内容に反応して、照応的にその内容を指示することである。「そう」類は、あいづち専用と言ってもよい「ああ」「ほう」「へえ」などと比較すれば、あいづちというカテゴリーの中でもより言語記号に近いものである。他方、「すごい」「ほんとう」「いいなー」などは、あいづち専用の定型表現として定着しているわけではない。これらと比べれば、「そう」類の方が定型表現であり、よりあいづちらしいと言える。

³ ここに挙げた非語彙的な「うん」「ふーん」は、口を閉じたまま鼻から空気を抜いて作り出すような、厳密には文字で表せない音声(?) のことと理解すべきであると思われる。例えば「うん」は、「はい」のように積極的に肯定を表すものではないと考えられる。

4.2. 先行する発話と「そう」類

次に、「そう」類に先行する対話相手の発話には、完全な文ばかりではなく、不完全なまま終わっている例が多いことを指摘する。以下の例を観察してみよう。これらの例では、「そう」類に先行する対話相手の発話は、テ形や格助詞など、文としては不完全な形で終わっている。

(19) [698-701]

- A →ようする←にですね、え、20日（はつか）とゆうふうにゆってるんですが、とにかく、えー、[社名]さんが、営業している年内中に納品できれば、いいんです。
- D はあはあ。
- D **まあ、それを目標にして。**
- A **そうですね。**〈笑い・複〉

(20) [6376-6380]

- H えっ、旦那さんは一緒に行かなかったんですか↑
- A うん、行かなかった、寝てたからね。
- H あそっか、そっか。
- H **で [名字] さんはだんなさんの実家に。**
- A **そうです。**

次の例には、先行する発話が疑問の上昇イントネーションを持っていることが「↑」で表記されている。したがって、不完全な文であっても疑問の意図は伝わっているであろう。

(21) [378-383]

- C え、けど、ツアーで行ったんですよ↑
- C あの一★、飛行機と一。
- A →ううん。←
- C **あ、飛行機とって一、部屋とって一、ホテルとって↑**
- A **そうそうそう。**
- C あ、そうなんだ。

次の例では、言いさし（注1を参照）であることが明記されている。

(22) [3958-3962]

- Q あっこれ、(うん Inf(女)) こっちか、(うん Inf(女)) 見たほうが
いいな。
A うん。
A これあげる、でー。<言いさし>
Q あ、そう、(うん、うん Inf(女)) じゃこれをもらって。
A はい。

次の例では、あいづちが括弧の中に表示されているが、対話相手の発話がまだ途中であるためである。表記の方法が違って、上の例と同じ「そう」類である。

(23) [768]

- A まあ、あの一、フロッピーで入稿しますが、こうゆう、(そうで
すね、はい 他者(男)) 作るかたですなえ、(はい 他者(男)) 用
と、それからこれが、えーと一、色分解をする、(はい 他者(男))
ほうの、(はい 他者(男)) レイアウトとゆうことで、3通お渡し
していたんですが、(あ一、そうですか、はい 他者(男)) それ
はどうしますか、あの一、どうゆう方法が望ましいですか。

また、先行する発話の途中で、次の話者が「そう」類を発話することもしばしばある。複数の話者による発話の重複(オーバーラップ)が起きるわけである。いくつかの例を以下に示す。「★」と「→ ←」(注1を参照)の位置に注意していただきたい。

(24) [8135-8139]

- G あれ、こないだあの、なんかあの一(え Inf(女))、北京の美術館
とかなんとかの住所一、あれは一、違ったのかな、そうすると。
H あ一、そうですか。
H あの一、こちらに届いてるのはこれ★なんですよね一。
G →そうですね。←
G はい、わかりました、じゃあ。

この上の例では、Hが「こちらに届いているのはこれ」まで言った瞬間、Gが「そうですね」という発話を行っている。以下の諸例も、同様である。

(25) [1839-1843]

- L 該当人数を母数として。〈言いさし〉
A そうだね、うん、うん。
L 母数とした、(うん Inf(女)) パーセントで算出したとか書い、
とけば★よろしいでしょうか。
A →そう、←そうです、そうですね、うん、うんうん。
A そうですね。

(26) [4045-4049]

- I ついていけない子が一、二、三人。
A あの一、0 (ゼロ) のたつ割算ってゆうのできないのね。
I そうなんですよ。
A その前まではわりとすらっとできるん★だけどねー。
I →そう、←だから3 (み) ケタになってくるとだめなんです
よ。

(27) [674-676]

- A で、そうしますとこちらでは、えーと、場合によって違うーんで
すが、なん行になるかによって、こことここが、あの、決まって
きますよね。
A で、えーと、行間と、あの一、文字指定は入るんですけども、
えー、行数がどれぐらいになるかってゆうのはちょっと英語
で、(はあはあ 他者(男)) ★決定してくるわけです。
D →そうですね、はい。←

次の例では、B の発話が終わらないうちに A が話し始めるということが三度繰り返されている。その結果、発話の重複が連続して起きている。

(28) [1625-1630]

- B それから [名字] 先生ってゆうのは (あ、し Inf(女))、内科
の先生で (はいはい、はい Inf(女))、あすこはあのいろんな、
えー施設も (はいはい Inf(女)) もっておられるところで★
院長先生。
A →そうですね、よく←、はい、はい。
B それから、あと [名字] さん、(わかる Inf(女)) は、(ええ、

ええ Inf(女) [名字] 先生に★おたずねしたってゆうように聞きましたけど。

- A →そうです、←とてもいい、かたですけど。
B で、やっぱり介護★の専門のかたもある程度。
A →そうです。←

以上、「そう」類に先行する対話相手の発話がしばしば、不完全なまま終わっていたり、「そう」類の発話との重複が起きたりする例を見てきた。

現実の自然談話では、不完全な文や発話の重複は珍しいことではない。この自然談話データでも、不完全な文や、まだ最後まで言い終わっていない文に対して、「そう」類を発話する例は多数見られる。つまり、話者は先行する文の形式、例えば、「のだ」文か、名詞述語文かなどを見極めて、それに対応して「そう」類を用いているわけではない。「そう」類が使用可能かどうかは、先行文の形式に左右されるわけではない、ということである。もしそのように対応するのであれば、対話相手が一文を完全に話し終わるのを待ってからでなければ、「そう」類は使えないことになる。

このような「そう」類のふるまいは、2.1.で紹介した先行研究では十分な説明ができない。現実の言語使用の観察から導き出した結論ではなかったもので、異なる結果となったのであろう。先行する発話が文としては不完全な形であるところで使われる「そう」類は、対話相手の発話途中というタイミングなど、むしろあいづちの特徴を示している。この 4.2.の「そう」類の例は、従来の研究にあてはめようとするれば、応答ともあいづちとも決めがたいものである。

4.3. 文法研究と談話研究

2.1.で述べたように、これまでの応答研究の中心課題の一つは、「どのような対話（隣接対）のパターンが可能か」を解明することであった。そして、言語研究者が作成する対話例は、形式（の違い）や意味（の違い）が適格度、許容度を左右するようなものになりがちである。作例による対話が 4.2.の例のような不完全な文や発話の重複を含むことは、普通ありえない。ところが、現実の言語使用は言語研究者の想像を超えたものである。作例のみに頼った分析では、本物の会話を分析したことにはならない。

筆者は、「そう」類の分析は文法と談話の関係を議論する上で示唆的であると考えている。「そう」類は、応答の一部としてもあいづちとしても頻繁に用いられ、よく目立つ。したがって言語研究者も注目してきた。しかし、応答の用法とあいづちの用法では、研究対象としての扱いやすさに差がある。応答の「そう」類は内省

を用いて分析が可能と思われたので、人為的に対話を作って研究されたが、あいづちの「そう」類は内省では研究不可能なので、もっぱら自然談話資料が用いられた。

応答の「そう」類は、従来の日本語学の研究手法（そもそも文法現象を研究するためのもの）を用いて分析された。しかしその結果は、上で見たように必ずしも実際の使用実態を反映しているわけではない。一方、あいづちの「そう」類は、他のあいづち形式とともに一括して分析される傾向にある。その理由として、あいづちそのものの意味・機能がとらえにくいこと、他のあいづち形式との違いなどがわかりにくいことなどが考えられる。

しかし、応答の「そう」類もあいづちの「そう」類も、そもそもは同一の語「そう」の様々な異なる場面での現れにすぎないはずである。それが、あるものは従来の研究手法で分析され、別のあるものはそれ以外の様々な方法で分析が試みられている、というのが、筆者の見方である。（なお、ここで述べた自然談話をめぐる問題については、北野 2001 にも関連する議論がある。）

5. おわりに

以上、2 節では「そう」類がこれまでどのように分析されてきたかを概観した。3 節では、自然談話データでの「そう」類の実態を観察し、4 節では、応答の「そう」類とあいづちの「そう」類の関係を詳細に分析し、応答とあいづちの関係、文法研究と談話研究の関係などを考察した。

この論文が目標としたことは、(1) 応答とあいづちの「そう」を包括的に理解するための観察と分析を提供し、それにより、応答研究とあいづち研究の両方に貢献することと、(2) 自然談話の実態の理解と研究方法の開発のためのヒントとなるようなものを、「そう」を手がかりにして示すことであった。

2.3. で述べた「そう」の文脈照応の問題など、検討すべき問題は多いが、今後の課題としたい。

参考文献

- 大島資生. 1995. 「応答句の『そうです』の機能について」『日本語研究』15 号, 109-119.
(東京都立大学国語学教室)
- 沖久雄. 1993. 「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』4 月号, 58-67.
- 奥津敬一郎. 1989. 「応答詞『はい』と『いいえ』の機能」『日本語学』8 月号, 4-14.
- 喜多壮太郎. 1996. 「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』1 月号, 58-66.
- 北野浩章. 2001. (予定) 「言語研究における『コードモデル』と『書き言葉』の悪影響について」『愛知教育大学研究報告』50 輯 (人文・社会科学編).

- 金水敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6巻4号, 67-91.
- 黒崎良昭. 1987. 「談話進行上の相づちの運用と機能－兵庫県滝野方言について－」『国語学』150集, 15-28.
- 現代日本語研究会編. 1997. 『女性のことば・職場編』東京：ひつじ書房.
- 小宮千鶴子. 1986. 「相づち使用の実態－出現傾向とその周辺－」『語学教育研究論叢』3号, 43-62. (大東文化大学語学教育研究所)
- ザトラウスキー, ポリー. 1993. 『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』東京：くろしお出版.
- 杉戸清樹. 1989. 「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち－談話行動における非言語的表現－」『日本語教育』67号, 48-59.
- 杉藤美代子. 1993. 「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』4月号, 11-20.
- ナガノ・マドセン, ヤスコ・杉藤美代子. 1999. 「東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用」『日本語科学』5号, 26-45.
- 堀口純子. 1988. 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号, 13-26.
- 堀口純子. 1991. 「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10月号, 31-41.
- 堀口純子. 1997. 『日本語教育と会話分析』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法－改訂版－』東京：くろしお出版.
- 松田陽子. 1988. 「対話の日本語教育学－あいづちに関連して－」『日本語学』12月号, 59-66.
- 水谷信子. 1983. 「あいづちと応答」『話しことばの表現』37-44. 東京：筑摩書房.
- 水谷信子. 1984. 「日本語教育と話しことばの実態－あいづちの分析－」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語編』261-279. 東京：三省堂.
- 水谷信子. 1988. 「あいづち論」『日本語学』12月号, 4-11.
- メイナード, 泉子・K. 1993. 『会話分析』東京：くろしお出版.
- 森山卓郎. 1989. 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1号, 63-88.
- 森山卓郎. 1993. 「否定の応答付加表現をめぐって」『日本語教育』81号, 166-177.
- Clancy, Patricia M., Sandra A. Thompson, Ryoko Suzuki, and Hongyin Tao. 1996. The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of pragmatics* 26. 355-387.
- Hayashi, Reiko. 1996. *Cognition, empathy, and interaction: Floor management of English and Japanese conversation*. Norwood, NJ: Ablex.
- Iwasaki, Shoichi. 1997. *The Northridge earthquake conversations: The floor structure and*

- the 'loop' sequence in Japanese conversation. *Journal of pragmatics* 28.661-693.
- Maynard, Senko K. 1986. On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation. *Linguistics* 24.1079-1108.
- Maynard, Senko K. 1989. *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.

(きたの ひろあき, 愛知教育大学)

The interactive uses of the anaphoric *soo* in Japanese conversational discourse

Hiroaki KITANO

Abstract

The anaphoric *soo*, which is used as part of response (e.g. *Hai, soo desu*. 'Yes, it is so.') or as a conversational continuer (e.g. *Soo soo*. 'Right, right. '), has been investigated in two types of research programs, (1) studies on Japanese discourse based largely on constructed dialogues, and (2) studies on backchannels, or *aizuchi*, of which *soo* and related forms (e.g. *soo desu ne, soo nan desu yo ne, soo ka, soo nanda*) constitute one of the major types. After reviewing the previous literature, this article looks at natural spontaneous discourse data, and shows how *soo* is used interactively. In particular, *soo* may be used even after grammatically incomplete or unfinished sentences, which previous studies using constructed examples failed to consider. It is claimed that the two types of *soo* cannot, and should not, be distinguished. For a better, comprehensive understanding of *soo*, it is crucial that we should employ conversational discourse data. Analyses of *soo* in interactive discourse can give many insights on the relationship between grammar and discourse.